

死に至る病

荻野賢太郎は、教室の扉から同級生の遠藤と彼の母親らしき女性が出てきたところで、丁度積木を積み上げるようにして頭の中で考えていた事柄を一端崩してから、隣に座る余所行き的好成绩をしている母に目をやった。荻野は満14歳の中学生である。あと半年も経たぬ間に高校受験を控えており、担任教員と進路面談を行うため教室の前の廊下に置いてある即席の待合席に腰を掛けていた。学生服を第一ボタンまで抜かりなく留めており、今にも首を絞めそうなホックも咽喉仏の辺りで律儀に留めていた。頭髮は短く、顔面は極端に白かった。顔立ちそのものは至って平凡なものであったが、その表面には多くの黒子が凡そ水玉模様のように付いていた。黒子は年を重ねるごとに増えていて、もしかすると成人式を迎える頃には顔が真っ黒になっているかもしれないと荻野は密かに思っていた。

そのとき彼が頭の中で考えていた事柄は、進路面談に関係深いことであり、彼の日々抱えている悩みでもあり、そういった事柄を脳内で考え廻らせれば考え廻らすほど、現実の彼は決まっただけでぼかんと口を半開きにした。一つは、自らの学力の問題だった。自分の成績に見合った進学先を一所懸命に探したのだが、とうとう見つかることが出来なかった。荻野は学年でも最低ランクの成績の持ち主である。授業中は大抵、教科書も開けず何かをぼーっと考えて時間を潰し、それについて特に学習塾に通っているという訳でもなかった。それは当然と言えば当然だった。本人としては高校に進学出来なくても構わなかったが両親がそれを望まなかった。彼は、ただ両親を悲しませたくないという理由だけで、進路希望用紙に三校の学校名を記したのだった。

もう一つの考え事は、数人の同級生から受けている虐めの問題である。彼は、一年半の間、誰に相談することも出来ずにたった一人、苦痛に絶えていた。『流腸』と呼ばれる行為を受けていて、それは掃除用具である箒の柄の先端部分で肛門をひたすら衝かれるという凄惨な行為であった。当初は学生服のズボンの上から間接的に肛門を衝かれていたのだが、ある日を境にして下着を脱ぐという決まりが出来て、それ以来、彼の肛門から出血がない日はほぼ無かった。放屁するのは当たり前で、糞が出てしまったことも三回あった。そして当然のように、その掃除をさせられるのである。便所の中で手淫を命ぜられることも少なくなかった。虐めグループが毎回写真などを用意してくるので、それを見ながら行為に及ぶことになった。それは、すべて授業で使う教科書で、そのほとんどが性的興奮を高める類のものではなかった。保健体育の女性器の図解、『ヴァギナ』という語句、『乳房』という語句、国語の与謝野晶子、樋口一葉、俵万智、美術のミロのヴィーナスの彫刻、モナ・リザ、ダヴィデ像、歴史の卑弥呼、フランシスコ・ザビエル、ペリー、マッカーサー、豊臣秀吉、『刀狩』という語句、仕舞いには、地理の世界地図、カスピ海、長野県、群馬県、『コンビニナート』という語句。挙げていけばキリが無い。荻野はもれなく射精した。そして当然のように、その掃除をさせられるのである。京都に行った修学旅行では三日分のパンツをすべて盗まれた。遠足の時には流石に弁当が盗まれるという事は無かったが箸が盗まれ、仕方なく素手で食べた。四日前は、シャープペンの芯がすべて盗まれた。三日前は、リコーダーの最下部のパーツが盗まれ、音が出なかった。一昨日は上履きの左が盗まれた。昨日は右が盗まれた。そして今、荻野は裸足である。教室に向かい廊下を歩いているとき、あなた上履きはどうしたのと母は言ったが、彼は失くしたんだと嘘を吐いた。それらの虐め行為は多くの虐め被

害者がそうであるように、荻野に対しても少なからずの生傷とストレスを与えた。しかし同時に彼は、その行為に対しある種の有難味を感じるようになってもいた。荻野の悩みとは、虐められる生活から抜け出したいというものではすでになく、この虐めが無くなってしまふことへの恐怖であった。脳内で思いを積み上げていく中、ふとそう感じたのだ。自分は虐めを受けるということとで学校という社会の一部になれているのではないか。虐めグループが虐めを止めてしまふと、自分は存在そのものを失ってしまうのではないか。顔面中が黒子で真っ黒になってしまふように、自分の存在自体が真っ黒になってしまふのではないか。友人もいない、親しい先輩も後輩もいない、ガールフレンドもない荻野少年にとって、虐めを受けている事実こそが他者と繋がるための唯一つの手段であり自己同一性の主成分となっていた。荻野を虐めているグループは全員女子である。

「正直なところ、いずれにせよ、今のキミの成績では難しいかもしれないね」

教室の中、進路希望用紙を注意深く何度か読み返してから担任教員が言った。それは荻野が凡そ予想していた台詞だったので驚きは無かったが、しかし隣に座る母の表情を覗き込むことには躊躇った。

「先生、賢太郎は何処の高校にも入ることが出来ないのでしょうか」

荻野の母はそう言って、息子の横顔を覗き込んだ。担任教員は机の上に置いた用紙を凝視しながら、直角に折り曲げた右手の人差し指で後頭部をぼりぼりと掻き始めた。

「いえ、そういう訳ではありません…ただし、正規の方法ではなくなります」

「正規の方法ではない、というと」

「要するに受験という形ではないということです、これは、その…誰にでも出来る方法ではない」と言つて担任教員は黒い紐で束ねられた革表紙の生徒名簿を持ち上げ、その一ページ一ページを調べ直す様にして、とんつ、と机の上に垂直に叩いて荻野の方に目をやった。

「荻野、キミは虐めを受けているね」

荻野は驚いたが、それを悟られる前に、静かにゆっくりと首を縦に振った。たとえ「はい」と声を上げたところで、今の自分では声量の調整が出来ず、極端に大きいか極端に小さい声になってしまふそうだ、と彼は懸念したのだった。よかった、と担任教員が呟くと、少しばかり高い調子で母は言う。

「一体なにが言いたいのでしょうか」

「それが、この方法で最も重要な条件のひとつなんです」と担任教員は言つて、荻野の目を見た。

「荻野、虐められっ子のプロになつてみないか？」

教室に沈黙が生まれた。そして暫くして、荻野は口を開いた。

「虐められっ子のプロですか」

「そのとおり。一般には知られていなんだが、そういうプロ集団が実際に存在する。その集団の中から、全国の学校法人に派遣されるんだ。もつとも、偏差値の高い学校や莫大な授業料を取るような私立の学校がほとんどだが、そういう媒体の中で仕事として虐めを受けることになる。要

するに、受験勉強や友人関係、家族の問題なんかでストレスを抱えているような学生たちの精神衛生を保つ役割を担うんだ、B組の香山ノリコを知ってるか」

「いいえ」

「彼女はプロだ。実年齢は21歳で、現に、この学校で虐めを受けている。年収は今年三十五になる僕よりも遥かにいい」

「荻野が母のほうを向くと、丁度右側の眉をびくりと動かしていた。

「童顔であれば長い期間現役で活躍することが出来る。企業に派遣されることも無くは無いのだが、やはり学校への派遣が主流であるらしい。もちろん、仕事内容はとても過酷なものだし、誰にでも出来るというものでもない。ただし、キミにはその素質があると僕は思っているんだよ」と言つて、担任教員は微笑んだ。

「でも、いずれ年を取ります」と荻野は言つた。

「そりゃそうさ、そうならたらプロ集団の中で指導係にでもなれば食いつくれの心配はないよ。もっとも、その頃には同年代の人たちが逆立ちしても稼げないような収入をキミは得ているだろうね」

「荻野が母のほうを向くと、右側の眉をびくりと動かしていた。担任教員は続ける。

「無論、ここからはキミが個人で考えることだ。僕は一つの選択肢を提示しただけ。一教職員はそういう素質を持っている生徒をスカウトする義務があるんだよ、そうでもしないと、素質を持った生徒はそんなプロ集団が存在することすら知ることが出来ないわけだからね。スカウトが成功すれば僕にも小遣い程度の謝礼金が入るには入るが……」

「母の右側の眉がびくりと動く。また、担任教員は続ける。

「……まあ、それは冗談として、キミたちには限らない選択肢があるんだよ。頭が良からうが悪からうが、スポーツが出来ようが出来まいが、ユーモアがあるうがなからうが、虐めていようが虐められていようが、可能性は皆に均等に分配されているものなんだ。それが14歳の特権だからね。キミはキミの人生を思い通りに出来る権利がある。明日から死ぬ気で勉強をする権利もなくなるはないんだよ」

夕暮れの帰り道、荻野は隣で歩く母を見る。母の表情は、今にも涙を流しそうでもあるし、もう涙を流し終えて吹っ切れているようでもあった。いずれにせよ何を考えているのかが、まったく分からないと荻野は思った。

「私は、アナタの人生をアナタの思い通りにさせてやる義務があるのかもしれないね」と母は言つた。

次の日の学校。女子生徒の首吊り死体が見つかった。3年B組、香山ノリコプロだった。香山ノリコプロは、十二枚にも及ぶ遺書を残し、自ら命を絶つたのである。荻野が教室に入った時、そこにいた生徒たちは妙に興奮しているようだった。後ろの席の女子が事件の全貌を他の女子に自慢げに話している声で、荻野もその凡そを嫌でも知ることになってしまった。ホームルームには副担任の女教師が現れて、担任はいま職員会議をしているので、とだけ言つて、平凡な形式の

ホームルームを行ってから女教師はほとんど走るようにして教室を出て、一番後ろの席の遠藤が、廊下は走らないでね、とからかうと、数人の生徒が笑った。

何時もと違う雰囲気のある教室に、何時もと変わらない一時間目の授業の開始をしらせるチャイムが響いた。

荻野は教科書を開いた。